

ヘーゲルは、カント哲学批判といえば必ず名前が挙がる哲学者の一人である。カントによって引き裂かれた自然と自由の二つの領域は、主観と客観、存在と当為などの対立を生み、永遠の分断を運命づける。感性界に属する存在として有限なわれわれは、どこまでも未完成な世界から外へ出ることができないまま、終わりなき道を理念の実現に向けてただひたすら歩み続けなければならない。ヘーゲルはカント哲学に横たわる「見渡しがたい裂け目」を克服すべきものと捉え、これと対決した。端的に言えば、それはカント的な自己批判的理性とは異なる精神のあり方を模索し確立する試みであったと言える。

ところで、この二人の哲学者は「完成者」と称されることがある。カントは啓蒙思想の完成者であり、ヘーゲルはドイツ観念論の完成者である、と。しかし、カント哲学の乗り越えを図ったヘーゲルは、啓蒙思想がヨーロッパ社会に及ぼした影響については必ずしも批判的でなかったように思われる。ヘーゲルの思想形成を振り返る際、常に言及されるのがフランス革命をめぐる彼の青年期のエピソードである。よく知られているように、テュービンゲンの神学校で学び始めて間もない頃、若きヘーゲルはフランスに現れたこの大きなうねりを歓迎した。事件の顛末を追うにつれ、彼の評価はいつでも肯定的というわけにはいかなかったにせよ、ヘーゲルはかつて覚えた感動を晩年に至るまで忘れることはなかった。フランス革命は彼にとって「輝かしい日の出」であった。

シャルチエ（R. Chartier, 1991）の言う通り、歴史の読解にどのような因果関係や解釈原理を持ち込むかについては慎重になるべきであるとしても、啓蒙思想とフランス革命が互いに切り離せない関係にあるのは確かである。ヘーゲルにおいても、両者の密接な関わりが意識されていたのは疑いようがない。他方、地域や担い手によって多様な展開を見せた啓蒙思想をカント哲学と同一視し、カント哲学批判がすなわち啓蒙批判となるように両者を結びつけたのは他でもないヘーゲルであったとも言われる（J. Robertson, 2015）。ヘーゲルがフランス革命に新しい時代の到来を見出して熱狂したのだとすれば、啓蒙思想の革命的性格をどのように捉え、そしてハイネが揶揄したようにある意味ではフランス革命以上に革新的であったカント哲学を、その啓蒙精神においてどのように批判したのか。

本稿の目的は、ヘーゲルによる啓蒙批判として、従来の研究において主に挙げられてきた歴史主義的批判、宗教学的批判、道徳哲学的批判の三つを検討し、ヘーゲルがカント的啓蒙を克服すべきものと見なしていた理由を探ることにある。確かにヘーゲルにとって、カントの啓蒙思想は歴史主義的考察の不徹底、理性宗教の限界、そして空虚で抽象的な道徳法則に依拠する形式主義的態度といった点において賛同しがたいものであった。しかし、こうした点からヘーゲルの啓蒙批判を読み解くことは間違いではないにせよ、そこでカントの欠点とされる側面をそもそも生み出した理性批判という着想およびその革新性が、ヘーゲルによってどのように理解されていたのかを説明するものではない。そこで本稿では、「啓蒙とは、人間が自らに責めのある未成熟状態から抜け出すことである」というカント的啓蒙の理念に対するヘーゲルの評価を、自己批判的理性の問題性に迫りつつ明らかにしたい。